

朝のこない夜はない

長所・短所を知り、 注意を払ってゆきましよう

副山首 鈴木正修

豊臣秀吉といえ、貧しい農民の息子から関白にまで登りつめた、文字通り立志伝中の人物です。その秀吉がある時、家臣にこんな話をしました。

「わたしが世の中を見ているところでは、君臣朋友の間に不和が生じるのは、すべて自分のわがままからきているようだ。自分が好むこと、必ずしも家来が好むとは限らない。上に立つ者はこのことに注意し、ときには目付けに命じて、自分のどこが受け入れられ、どこが嫌われているかを調べさせること



も必要だ。こうして自分の長所・短所を知り、常に注意を払わなければ、自分の過ちに気がつくことなく、その過失がしだいに大きくなっていき、諸人にうとまれ、ついには家を滅ぼし、国を失ってしまう結果になるだろう」

続けて秀吉は、家臣に家や国を守るために『禁物四味』を去り、『妙薬三味』を常に服用することを説いています。

『禁物四味』とは

一、私心を持つこと。

二、邪悪な心を持つこと。

三、物事を怠ること。

四、非義を行なうこと。

『妙薬三味』とは

一、天を恐れること。

二、身を修めること。

三、節儉を守ること。



この七項目を、秀吉は天下を取るまでは良く実行したようです。しかし、天下を取ってからはなかなか実行できなかったようです。特に世継の秀頼が生まれてからは、無軌道な振舞いが多かったようです。本人の言うとおり「自分の過ちに気がつくことなく、その過失がしだいに大きくなっていき」ついに豊臣家滅亡へとつながっていったと思われます。

この秀吉の逆が徳川家康ではないでしょうか。家康は関ヶ原の合戦に勝つて天下を握ったのち四年、六十一歳の正月十五日に、あの有名な遺訓を子孫に残しています。

「人の一生は重荷を背負いて遠き道を行くがごとし、急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。心に望み起らば困窮したるときを思い出すべし。

堪忍は無事長久の基、怒りを敵と思え。

勝つことばかり知りて負けることを知らざれば、害その身にいたる。

おのれを責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり。



けいちょう ねんじょうがつ
慶長八年正月十五日 にち

人はただ 身の程をしれ くさの葉の つゆの重きは おつるものかな」

これは家康の長い年月の血のにじむ体験から得た教訓そのものです。そし

てこの教えの通り家康は人生を生き、子孫に垂範し、秀吉とは逆に徳川三百

年の礎を築いたのです。

人は晩年が大事であるときよく言われます。若いときに欠点があっても、晩

年が良ければその人の価値は上ってくるものです。

古人の詩にも「天意夕陽を重んじ、人間晩晴を貴ぶ」の句があります。日

中どんな快晴でも夕方に雨が降れば、その日一日中が雨でも降ったように感

じられるのと同じで、人間も晩年が晴れやかなものでないと、いくら若い頃

に活躍しても、それが薄らいでしまうというような意味だと思います。



朝のこない夜はない (200)